

福井市西部沿岸部及び東部山間部のアクセント分布

松倉 昂平

キーワード: N型アクセント 三型アクセント 二型アクセント 三國式
垂井式 無型アクセント 福井市方言

要旨

福井市内の沿岸部及び東部山間部の 29 地点でアクセント調査を行った結果、沿岸部の広い範囲が三型アクセント及び二型アクセントの分布域であること、東部山間部には式の対立のない多型アクセントが分布することが確認された。本稿では、各地点のアクセント体系の概略を示すとともに、複合名詞のアクセントや類別語彙との対応関係を対照・比較することで、共時的な性質と歴史的な関係の両面から見た各体系の特徴・相違点を明らかにする。

1. 調査地・調査結果の概要

福井県福井市は人口約 26 万人を擁する福井県の県庁所在地である。市域は東西に長く、西端は日本海に面し、市の中央部には福井平野が広がる。沿岸部と平野部の間は丹生山地で隔てられている。市の東部は山間地（越美山地）である。人口の大半は中心市街地のある平野部に集中している。

本研究の調査対象は、西端の沿岸部付近と東端の山間部である。福井市中心部方言は無型アクセント方言（弁別的な型の区別のない方言）であることが知られているが、平野部にある市街地からおおよそ 15km 以上離れた沿岸部及び山間部には、弁別的な型の区別を明瞭に有する方言が広く分布している。中心部方言が無型アクセントであっても、福井市全域が無型アクセントであるとは限らない。同じ市内にはありながら、沿岸部、平野部、東部山間部の 3 地域はそれぞれ全く異なる方言圏に属すると言えるほどにアクセント面の相違が著しい。

沿岸部はおおよそ N 型アクセントの分布域であり、4 種の三型と 1 種の二型が確認された。ただし無型の地点も存在する。東部山間部は、平野部に近い足羽川下流域が無型アクセントの分布域で、上流方面に 3 種の多型アクセントが分布する。無型と多型の等語線は、かつての行政境界（昭和の大合併以前の足羽郡と大野郡の郡境）におおよそ一致する。

このように福井市内には多型アクセント、N 型アクセント（三型及び二型）、無型アクセントの分布が揃い、類型論的な多様性に富んでいる。また多型に分類される中には類別体系の大きな食い違いが見られ、系統的な多様性もまた認められる。これらは福井市を含む福井県嶺北地方全体の多様性にも匹敵するもので、福井市のアクセント分布はいわば本地方全体のアクセント分布の縮図である。よって本稿で福井市の西端と東端の諸体系を併せ

て対照・比較することは、本地方全体を視野に入れた対照・比較のパイロット研究としての意義を持つ。

2. 先行研究

(a) 平山輝男 (1953)

福井県嶺北地方のアクセント分布の大略を初めて明らかにした平山 (1953) によれば、現在の福井市西部は平山が「特殊音調」と呼ぶ体系の分布域、東部山間部のうち旧足羽郡域は「特殊音調」、旧大野郡域は「勝山・大野式音調」の分布域である。なお「特殊音調」が具体的にどのような体系であるのか平山 (1953) にはほとんど言及がない。本稿は平山 (1953) の調査結果を再確認し平山の言う「特殊音調」や「勝山・大野式音調」の内実を明らかにするものと位置付けられるが、今回、東部山間部には「特殊音調」の存在が確認できなかった。また東部山間部には平山の言う「勝山・大野式音調」(＝垂井式) の他、系統的に大きくかけ離れた別の体系が分布することが明らかになった。

(b) 佐藤亮一 (1983), 山口幸洋 (1984)

福井市とその周辺で多人数調査を行った佐藤 (1983) によれば、福井市内の(当時の)高年層話者は、助詞が付いた形では型の区別がみられない話者がほとんどであるが、調査法を工夫すれば多くの話者に単語言い切りの形(助詞が付かない形)において「三国式アクセント」に一致する型の対立が認められたという。

山口 (1984) は、福井市東部郊外の福井市成願寺町に型の区別が明瞭な三国式話者の存在を確認し詳細な体系記述を行っている。市内でも中心市街地から離れた地域であれば、型の対立が安定している話者に会い得たようである。

これらは市街地近辺の平野部で行われた調査・研究であり、現在同じ市内にあるとはいえ本稿とは対象地域が異なる。

(c) 新田哲夫 (2012), 松倉昂平・新田哲夫 (2016) など

越前町小樟方言(新田 2012)、坂井市三国町安島方言(松倉・新田 2016)、あわら市北潟方言(同左)など、近年、福井市周辺の沿岸部に三型アクセントの発見が相次いでいる。今回、福井市内の沿岸部にも三型アクセントの分布が確認されたことで、福井県嶺北地方の沿岸部全域にわたって三型アクセントが点在することが明らかになった。

3. 調査方法・調査地点について

調査は話者と面談し調査票を読み上げて頂く方式で行った。無型方言を除き多くの地点においてアクセントの区別意識は概ね明瞭で、リスト読み上げを基本に話者の内省も得ながら体系を記述することが可能である。

2013年8月～2017年6月にかけて、7地区¹（橐地区、鷹巣地区、国見地区、越廼地区、一光地区、本郷地区、美山地区）29地点42名につき調査した結果を報告する。なお参考として福井市沿岸部の北端に接する坂井市三国町米納津地区の調査結果も併せて載せる。

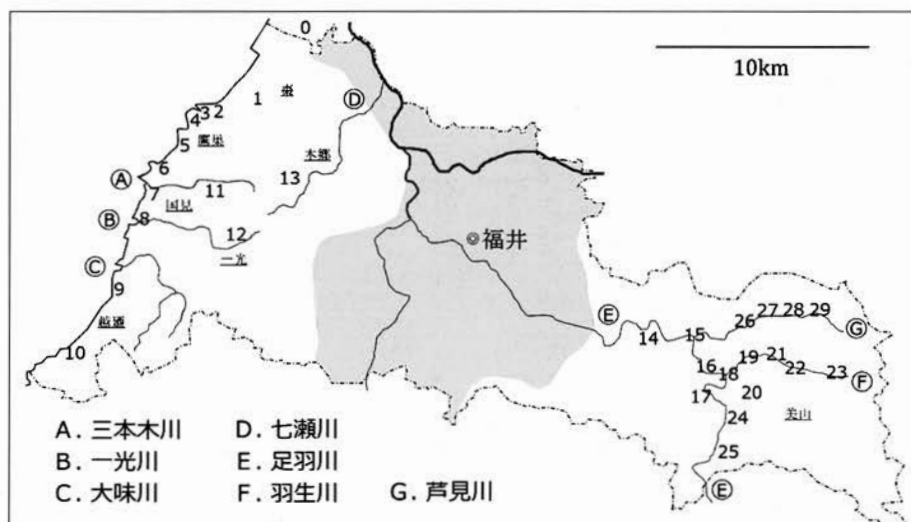


図1 福井市内の調査地点の分布（網掛けは平野部）

(1) 調査地点と話者情報の一覧（括弧内は話者の生年西暦下2桁と性別）

0. 三国町米納津('42f, '40f, '40m)、1. 浜別所('40f, '40m)、2. 浜住('34m)、3. 和布('37m)、
4. 養('43m)、5. 長橋('52m)、6. 菅生（北菅生町('44m)・南菅生町('33m, '39f)、
7. 鮎川('29f, '34f, '35m, '38f)、8. 大丹生('28f, '29f)、9. 蒲生('40f, '43f)、
10. 居倉('37f)、11. 国見('33f, '37f, '39f)、12. 上一光('35m)、13. 清水平('39f)、
14. 市波('33m)、15. 瀬ヶ口('32f)、16. 品ヶ瀬('32f)、17. 蔵作('35f)、18. 境寺('30m)、
19. 薬師('33m)、20. 間戸('35f)、21. 縫原('30m)、22. 大宮('33m)、23. 計石('31m)、
24. 東天田('34m)、25. 河原（西河原町('34m)・東河原町('34m))、26. 吉山('26m)、
27. 簗谷('33m)、28. 西中('33m, '36f)、29. 所谷('30m, '35m)

北菅生町と南菅生町、及び西河原町と東河原町はそれぞれまとめて1地点として扱う。

調査地点は話者が言語形成期を過ごした地点を表しており、必ずしも現住地とは一致しない。

¹ それぞれ旧坂井郡橐村、旧坂井郡鷹巣村、旧丹生郡国見村、旧丹生郡越廼村、旧丹生郡西安居村の一部、旧坂井郡本郷村、旧足羽郡美山町に相当。西安居村は1954年、国見村は1959年に福井市に編入。橐村、鷹巣村、本郷村は旧坂井郡川西町を経て1967年に福井市に編入。越廼村と美山町は2006年編入。美山町は1955年以前の旧大野郡芦見村、羽生村、上味見村、下味見村、旧足羽郡上宇坂村、下宇坂村に相当。

4. 西部沿岸部のアクセント

福井市沿岸部は、地形・産業・方言いずれの観点から見ても大きく北部と南部に二分することができる。海岸地形を見ると、北部は砂丘が広がり平坦地が広いが、南部は磯浜で海岸に山地が迫り平坦地が少ない。産業もその地形に対応して、北部は農村、南部は漁村となる。調査地点の中では、浜住以北が砂浜・農村社会（北部）、長橋以南が磯浜・漁村社会（南部）に属し、和布・蓑付近がその境界地帯にあたる。そしてアクセント的にも和布・蓑付近を境界に「北部＝二型」「南部＝三型」という大まかな区分が可能であり、地理的・社会的な境界とアクセント境界がほぼ一致すると言える。

沿岸部付近 14 地点の調査結果を図 2 に示す（三国町米納津を含む）。

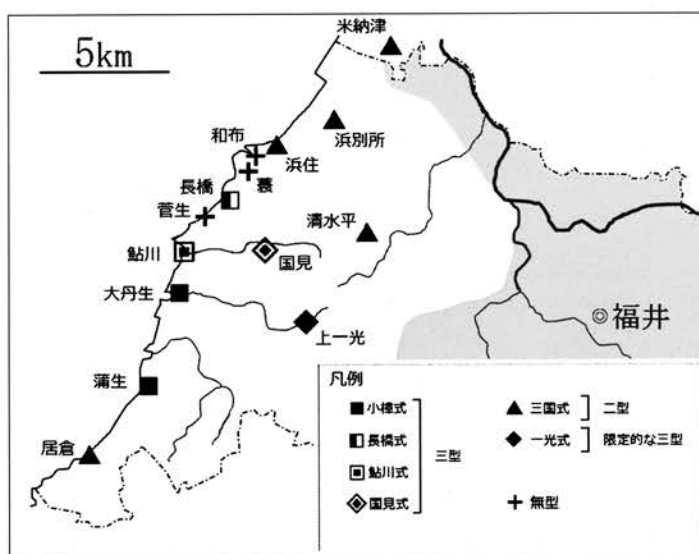


図 2 西部沿岸部のアクセント分布

14 地点中、5 地点（長橋、鮎川、大丹生、蒲生、国見）に 4 種の三型、5 地点（米納津、浜別所、浜住、居倉、清水平）に 1 種の二型、3 地点（和布、蓑、菅生）に 無型 が分布する。残る 1 地点（上一光）の解釈については 4.6 節を参照。

4 種の三型のうち蒲生と大丹生に分布する 1 種は越前町小樟方言（新田 2012）の体系と類似するもので、小樟式と呼ぶこととする。

以下、三型諸体系に区別される 3 つの型をそれぞれ A, B, C 型と呼ぶが、新田（2012）など先行研究において用いられる A~C 型とその所属語彙はよく一致し²、方言間の相違は主として各型の音声実現にある。

² いわゆる金田一語類（金田一春彦 1974）との対応関係（類別体系）は福井市周辺の三型諸体系と一致し、2 拍名詞が 1 類=A/2・3 類=B/4・5 類=C、3 拍名詞がおおよそ 1・4 類=A/5 類=B/6・7 類=C（6.3 節も参照）。

本稿で用いる音調記号は次の通り：〔…上昇、〕…下降、○〕…拍内下降。括弧（ ）はその下降や上昇が発話によってあったりなかったりすることを表す。

4.1 小樟式（三型）

蒲生と大丹生の 2 地点には、越前町小樟方言と類似する三型アクセントが分布する。両地点の間には若干の相違点もあるが³、(2) には蒲生方言を取り上げる。

(2) 小樟式（蒲生）の 2~5 拍文節の音調

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍
A	箱	ハ[コ]	ハ[コ]ガ	ハ[コヨ]リ	ハ[コヨリ]モ
	魚		サ[カ]ナ	サ[カナ]ガ	サ[カナヨ]リ
	雷			カ[ミナ]リ	カ[ミナリ]ガ
B	山	ヤ[マ]	ヤ[マ]ガ	ヤ[マヨ]リ	ヤ[マヨリ]モ
	心		コ[コロ]	コ[コロ]ガ	コ[コロヨ]リ
	朝顔			ア[サガオ]	ア[サガオ]ガ
C	窓	マ[ド]	マ[ド]ガ	マ[ド]ヨリ	マ[ド]ヨリモ
	畑		ハ[タ]ケ	ハ[タ]ケガ	ハ[タ]ケヨリ
	甘酒			ア[マ]ザケ	ア[マ]ザケガ

A 型は文節末から数えて 2 拍目に下降が生じる型（ただし 2 拍語は○[○]）、B 型は下降が生じない型、C 型は語頭から数えて 2 拍目に下降が生じる型であり、下降の有無と下降の位置が区別される体系である。A 型と C 型は 3 拍以下の文節で対立が中和するが、この点も越前町小樟方言と共通する。

(3) (比較) 越前町小樟方言の 2~5 拍文節の音調（新田 2012）

A	○[○]○	○[○]○	○[○○]○	○[○○○]○
B	○[○]	○[○○]	○[○○○]	○[○○○○]
C	○[○]○	○[○]○	○[○]○○	○[○]○○○

4.2 長橋式（三型）

長橋式は、福井市沿岸部の三型分布域の北端に位置する。型の区別がない方言に囲まれながら（図 2 参照）、少なくとも本稿の話者の型の区別意識はごく明瞭である。

³ 大丹生では 2 拍 A、C 型が○[○]○となる。その他、3 拍 C 型の音調に興味深い相違点がある。3 拍 C 型の名詞は蒲生と同じく○[○]○であるが、3 拍 C 型の動詞は○[○]○○（[ア]ルク、[ナ]ゲタ等）となり、品詞により若干異なる音調で現れる（蒲生の 3 拍 C 型は名詞も動詞も○[○]○）。おそらく通時的には○[○]○○の方が C 型のより古い姿をとどめるものである。名詞がすでに○[○]○○>○[○]○の変化を経た一方、動詞は変化に対してより保守的で未だに古い音調を維持しているものと考えられる。

(4) 長橋式の 2~5 拍文節の音調 (言い切り形)

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍
A	庭	ニ[ワ]]	ニ[ワガ]]	ニ[ワヨリ]]	
	魚		サ[カナ]]	サ[カナガ]]	サ[カナヨリ]]
	雷			カ[ミナリ]]	カ[ミナリガ]]
B	山	ヤ[マ	ヤ[マガ	ヤ[マヨリ	
	心		コ[コロ	コ[コロガ	コ[コロヨリ
	朝顔			ア[サガオ	ア[サガオガ
C	窓	[マ]ド~[マド]]	マ[ド]ガ	マ[ドヨリ	
	畑		ハ[タ]ケ	ハ[タケ]ガ	ハ[タケヨリ
	甘酒			ア[マザ]ケ	ア[マザケ]ガ

3つの型の区別の在り方は整然としており、A型は末位拍内部に下降が生じる型(−1型)、B型は下降が生じない型(0型)、C型は次末拍の直後に下降が生じる型(−2型)で、下降の有無と文節末から数えた位置が区別される体系である。

長橋式には言い切り形(文末形)と接続形(直後に他の文節が続く時の形)の区別がある。言い切り形では3つの型の区別が明瞭に実現するが、2拍接続形ではA型とB型の、3拍以上の接続形では全ての型の対立が中和してしまう。

(5) 長橋式の 2~4 拍文節の音調 (接続形)

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍
A	庭	ニ[ワ]...	ニ[ワガ]...	ニ[ワヨリ]...
	魚		サ[カナ]...	サ[カナガ]...
B	山	ヤ[マ]...	ヤ[マガ]...	ヤ[マヨリ]...
	心		コ[コロ]...	コ[コロガ]...
C	窓	[マ]ド~[マド]...	マ[ドガ]...	マ[ドヨリ]...
	畑		ハ[タケ]...	ハ[タケガ]...

この広範囲に生じる型の中和は、単なる型の区別の曖昧化とは異なる現象と思われる。先に述べた通り話者の型知覚は明瞭であり、(4)も(5)も「長橋ではかくあるべき」という内省を伴っている。

4.3 鮎川式(三型)

小樟式と長橋式には「A, C型=下降あり/B型=下降なし」という共通点があるが、鮎川式は表面上の音調も各型の対立の在り方も周辺の体系とは大きく異なる。

鮎川ではほぼ同世代の4名の話者(1929年生女性、1934年生女性、1935年生男性、1938

年生女性) に対し調査を行ったが、主に 3 拍以上の B, C 型の音調について個人差が認められた。B, C 型の音調に関する個人差及び個人内の揺れは、これらの型が現在大きな音調変化を被りつつありその変化の進度が話者により異なることの反映であると推測される。

まずは、最も古い音調を保持するとみられる 1935 年生男性 (以下、話者 35m) の調査結果に基づき各型の音調を概説する。

(6) 鮎川式の 2~5 拍文節の音調 【話者 35m】

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍
A	庭	ニ[ワ。ニ[ワ]...	ニ[ワガ(II)]	ニ[ワヨリ	ニ[ワヨ]リモ
	魚		サ[カナ(II)]	サ[カナ]ガ	サ[カナ]ヨリ
A3	雷			カ[ミナ]リ	カ[ミナ]リガ
A4	水色			ミ[ズイロ(II)]	ミ[ズイロ]ガ
B	山	ヤ[マ。[ヤ]マ...	[ヤ]マ[ガ	[ヤ]マヨリ	[ヤ]マヨ[リ]モ
	心		[コ]コ[ロ	[コ]コロ[ガ	[コ]コロ[ヨ]リ
	朝顔			[ア]サガ[オ~	[ア]サガ[オ]ガ~
C	窓	[マ]ド。[マ]ド...	[マ]ドガ	[マ]ドヨリ	[マ]ドヨリモ
	畑		ハ[タ]ケ	ハ[タ]ケガ	ハ[タ]ケヨリ
	甘酒			ア[マ]ザケ	ア[マ]ザケガ

A 型は語頭から数えて 3, 4 拍目の後ろに下降が生じる型 (ただし 2 拍文節は○[○。○ [○]...)、C 型は語頭から数えて 1, 2 拍目の後ろに下降が生じる型である。A 型は語頭から数えて 3 拍目の後ろに下降が生じる音調を基本とするが、4 拍以上の A 型語は「3 拍目が無声子音を含まない狭母音の拍かつ 4 拍目が広母音」である場合下降が 4 拍目に後退する (本稿では下降が 3 拍目に生じる型を A3 型、4 拍目に生じる型を A4 型と呼ぶ)。C 型は助詞の有無・長さによらず 2 拍語が 1 型 ([○]○...)、3 拍以上の語が 2 型 (○[○]○...) となる—すなわち単語レベルで下降位置が決まる—ため、2 拍語と 3 拍以上の語の間には「系列化⁴⁾」の関係が成り立たない (例: [マ]ドガ≠ハ[タ]ケ)。

B 型は、3 拍文節の場合語頭から数えた 1 拍目と 3 拍目が高く、4 拍以上の場合 1 拍目と 4 拍目の 2 か所に高さのピークを持つ重起伏調を取る (ただし 2 拍言い切り形は○[○、2 拍接続形は[○]○...)。(7) に示す通り、2 つ目の山は文節長が増えても語頭から数えて 4 拍目より後には後退しない⁵⁾。なおこの 2 つ目の山のピッチは大抵 1 拍目よりも低く中程度の

⁴⁾ 「p 拍の自立語 (名詞) に q 拍の助詞類が付いた音調型は、同じ系列の (p+q) 拍名詞の音調型と同じになる」現象 (上野善道 2012: 48)。

⁵⁾ この独特の重起伏調は鮎川方言と同じく三型アクセント体系を持つ本土方言の一つ、隠岐島五箇方言の (松森晶子 (2016) における) A 型の音調にごく類似する。

五箇方言の A 型 (鳥): トリ トリが トリから トリからも トリからしか… (松森 2016: 25)

高さで実現し (HLLM, HLLML...), 接続形ではしばしば 2 つ目の山が消失する。

(7) 2~7 拍 B 型文節の音調【話者 35m】

	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6, 7 拍
山	ヤ[マ	[ヤ]マ[ガ]	[ヤ]マヨ[リ	[ヤ]マヨ[リ]モ	
心		[コ]コ[ロ	[コ]コロ[ガ]	[コ]コロ[ヨ]リ	
朝顔			[ア]サガ[オ	[ア]サガ[オ]ガ	[ア]サガ[オ]ヨリ
米袋				[コ]メブ[ク]ロ	[コ]メブ[ク]ロガ
浴衣姿					[コ]カタ[ス]ガタ(ガ)

次に、B, C 型の音調が変化を被りつつある他 3 名の話者の体系について、1929 年生女性 (話者 29f) の調査結果を例に述べる。

(8) 鮎川式の 2~5 拍文節の音調【話者 29f】

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍
A	庭	ニ[ワ(㊦)]	ニ[ワガ]]	ニ[ワヨ]リ	ニ[ワヨ]リモ
A3	魚		サ[カナ]]	サ[カナ]ガ	サ[カナ]ヨリ
A3	雷			カ[ミナ]リ	カ[ミナ]リガ
A4	鏡		カ[ガミ]]	カ[ガミガ]]	カ[ガミヨ]リ
A4	水色			ミ[ズイロ]]	ミ[ズイロ]ガ
B	山	ヤ[マ	ヤ[マ]ガ~ [ヤ]マ(㊦)ガ	ヤ[マ]ヨリ	ヤ[マ]ヨリモ
	心		コ[コ]ロ~ [コ]コ[ロ	コ[コ]ロ(㊦)ガ	コ[コ]ロヨリ
	朝顔			ア[サ]ガ(㊦)オ	ア[サ]ガ[オ]ガ~ ア[サ]ガオガ
C	窓	[マ]ド	マ[ド]ガ~ [マ]ドガ	マ[ド]ヨリ	マ[ド]ヨリモ
	畑		ハ[タ]ケ	ハ[タ]ケガ	ハ[タ]ケヨリ
	甘酒			ア[マ]ザケ	ア[マ]ザケガ

A 型に関しては A3 型と A4 型への分裂が 3 拍語にも生じる点、話者 35m と異なる。3 拍目が「無声子音を含まない狭母音の拍または特殊拍」である 3 拍語は下降が助詞部分に後退し A4 型となる。

C 型に関しては、自立語 (名詞) の長さにかかわらず 3 拍以上の文節が 2 型に統一されつつあり「系列化」が完全に成り立ちかけているが、依然「2 拍名詞+1 拍助詞」には 1 型 ([マ]ドガ) が聴かれ、これが系列化の例外となっている。

2 つ目の山が 4 拍目より後ろにはずれていかない点まで一致する。ただし 4 拍文節で 2 つ目の山が 3 拍目にある点のみ鮎川の B 型と異なる。

3 拍以上の B 型は音声的な揺れ幅が大きく語により発話により様々な音調を取る。3, 4 拍文節には話者 35m とほぼ同様の重起伏調も聴かれるが、多くの発話では 2 つ目の山が聴かれず（なおかつ 1 つ目の山が 2 拍目に後退して）C 型との区別が付かない⁶。

B, C 型の音調に聴かれるこれらの個人差・個人内のバリエーションは、各型において今まさに音調変化が進行中であることを反映するものと解釈し、各話者の音調がその変化過程のどの段階に位置付けられるかを (9) にまとめる。

(9) 3, 4 拍 B, C 型の変化過程と各話者の通時的な位置付け

← 【話者 35m】 →				
← 【話者 29f, 34f, 38f】 →				
段階①	>	段階②	>	段階③
3B [ヤ]マ[ガ]	>	[ヤ]マ(㊦)ガ	>	ヤ[マ]ガ
[コ]コ[ロ]		[コ]コ(㊦)ロ		コ[コ]ロ
4B [ア]サガ[オ]	>	ア[サ]ガ(㊦)オ	>	ア[サ]ガオ
3C [マ]ドガ	=	[マ]ドガ	>	マ[ド]ガ
ハ[タ]ケ		ハ[タ]ケ		ハ[タ]ケ
4C ア[マ]ザケ	=	ア[マ]ザケ	=	ア[マ]ザケ

話者 35m が段階①から②、次いで他の話者が段階②から③に位置する。①は元来の B, C 型の対立を保持している段階で、②は、B 型が C 型の音調に接近し両型が合流しつつある中間段階にあたる。段階③は 3 拍以上の B, C 型が完全に合流したと想定する段階であるが、完全に段階③に移行している話者は確認していない。一連の変化全体としての動機と結果は「重起伏調の解消と語頭拍の低下」そして「(3 拍以上の) B, C 型の合流」である。

4.4 国見式（三型）

鮎川から東へ約 3km、三本木川の上流域に位置する山村、国見地区にも独自の三型が分布する。2, 3 拍の短い語・文節の表面上の音調は鮎川方言とよく類似するものの体系の枠組みは大きく異なるようである。

⁶ 話者 29f の場合、C 型語に対する [○]○[○]、○[○]○[○] の発音は明確に否定されるが、B 型語に対する ○[○]○、○[○]○[○] は許容され、正確には、ほぼすべての B 型語が C 型を併用するとも言える状態にある。ただし、B 型語における ○[○]○、○[○]○[○]…は「かしこまった調子」「本を読むような調子」で、重起伏調の [○]○[○]、○[○]○[○]…が鮎川方言本来の発音であるという。調査票読み上げという堅苦しく単調な環境では B 型が ○[○]○、○[○]○[○]…となり C 型との対立が紛れがちであるが、話者 29f, 34f, 38f についても、より自然な発話環境では本来の B, C 型の対立がより明瞭に現れるのではないかと思われる。

(10) 国見式の 2~5 拍文節の音調

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍
A	庭	[ニワ	ニ[ワガ	ニ[ワヨリ	ニ[ワヨリモ
	魚		サ[カナ	サ[カナガ	サ[カナヨリ
	鶏			ニ[ワトリ	ニ[ワトリガ
B	山	[ヤマ~ [ヤ]マ	[ヤ]マガ~ [ヤマ]ガ	ヤ[マ]ヨリ	ヤ[マヨ]リモ
	心		[コ]コロ~ [ココ]ロ	コ[コ]ロガ	コ[コロ]ヨリ
	朝顔			ア[サ]ガオ	ア[サガ]オガ
C	窓	[マ]ド	[マド]ガ	マ[ドヨ]リ	マ[ドヨ]リモ
	畑		[ハタ]ケ	ハ[タケ]ガ	ハ[タケヨ]リ
	甘酒			ア[マザ]ケ	ア[マザケ]ガ

※2 拍 B 型の音調には個人差が見られる（話者 33f, 37f は[ヤマ、話者 39f は[ヤ]マ）

A 型は下降が生じない型、B 型は文節末から数えて 3 拍目に下降が生じる型（ただし 2 拍 B 型は[○○~[○]○、3 拍 B 型は[○○]○にも）、C 型は文節末から数えて 2 拍目に下降が生じる型と考えられる。B, C 型は 3 拍以下の短い文節でも 5 拍以上の長い文節でも対立が不安定になり、6 拍以上の文節になると B, C 型いずれかの音調に統一される形でほとんど両型の対立が現れない。

(11) 「2, 3 拍名詞+ヨリモ/ニナラ」の音調

A	ニ[ワヨリモ	サ[カナヨリモ	ニ[ワニナラ	サ[カナニナラ
B	ヤ[マヨ]リモ	コ[コロヨ]リモ	ヤ[マニナ]ラ	コ[コロニナ]ラ
C	マ[ドヨ]リモ	ハ[タケヨ]リモ	マ[ドニナ]ラ	ハ[タケニナ]ラ

ヨリモが付いた B, C 型文節は B 型の音調（-3 型）に統一され、ニナラが続いた B, C 型文節は C 型の音調（-2 型）に統一される⁷。B, C 型の対立が明瞭にかつ比較的安定して実現するのは 4 拍文節に限られており、B, C 型が合流し二型化する直前の段階にあると考えられる。

4.5 三国式（二型）

旧坂井郡域にあたる福井市北西部周辺の 4 地点（浜別所、浜住、清水平、坂井市三国町米納津）と福井市南西端の 1 地点（居倉）には、福井市成願寺町方言（山口 1984）やあわら市清滝方言（松倉 2015）など福井市周辺各地に従来報告されてきた二型アクセント（三

⁷ 下降位置の決定にはおそらく助詞部分の構造が関与する。ヤ[マ・ニ]・ナラ（B 型）やマ[ド・ヨリ]・モ（C 型）といった助詞と助詞の間に下降が生じる音調を回避するために下降位置が前後し、1 拍助詞+2 拍助詞で終わる文節は-2 型、2 拍助詞+1 拍助詞で終わる文節は-3 型に統一され B, C 型の対立が中和する。

国式) が分布する。(12) に浜別所の調査結果を挙げる。

(12) 三国式(浜別所)の2~5拍文節の音調

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍
α	庭	[ニ]ワ	[ニワ]ガ	ニ[ワヨ]リ	ニ[ワヨリ]モ
	魚		[サカ]ナ	サ[カナ]ガ	サ[カナヨ]リ
	雷			カ[ミナ]リ	カ[ミナリ]ガ
β	山	[ヤマ	[ヤマガ	ヤ[マヨ]リ	ヤ[マヨリ]①モ
	心		[ココロ	コ[コロガ	コ[コロヨ]①リ
	朝顔			ア[サガオ	ア[サガオガ

三型諸体系における A 型と C 型が合流して二型化した体系に相当する。本稿では、概ね三型諸体系の A, C 型に対応する型を α 型と呼び、B 型に対応する型を β 型と呼ぶ。

α 型は文節末から数えて 2 拍目の直後に下降が生じる型、 β 型は下降が生じない型である。小樟式(4.1 節)の A 型と C 型が下降位置の対立を失い合流した体系と推測され、表面上の音調は小樟式と類似する。

他の 4 地点でも浜別所と概ね同じ音調が聴かれるが、三国町米納津方言は、 β 型が接続形において α 型と同じ音調に実現し、接続形では両型の対立が中和するという特徴を持つ。

(13) 3, 4 拍接続形の音調(福井市浜別所方言と三国町米納津方言)

浜別所			米納津		
α	[ニワ]ガ...	サ[カナ]ガ...	α	[ニワ]ガ...	サ[カナ]ガ...
β	[ヤマガ]...	コ[コロガ]...	β	[ヤマ]ガ...	コ[コロガ]...

浜別所方言では、 β 型文節の直後に他の語が後続するとき、 β 型の文節末境界に下降が生じ、後続の語が β 型文節に対し低く付く⁸(例: コ[コロガ]アル)。この下降を文節境界を表示する一種の境界音調と捉えると、米納津ではこの境界下降が 1 拍早く、文節末から数えて 2 拍目の後ろに実現するために、結果として α 型との中和を生じると解釈することができる。

4.6 一光式(限定的な三型)

大丹生地区より一光川の上流 8km の山中に位置する上一光地区には、概ね前節の三国式と類似しながら 2 拍語にのみ 3 つの型が区別される「限定的な」三型が確認された。

⁸ 小樟式(蒲生、大丹生)、長橋式、一光式の B 型も全く同じ特徴を持つ(ヤ[マガ]..., コ[コロガ]...)。越前町小樟方言の B 型(新田 2012: 67)や、浜別所と同じ三国式のあわらし清滝方言の B 型(松倉 2015: e11)にも同様の境界下降が生じる。

(14) 一光式の 2, 3 拍名詞の音調

型	語例	2 拍	3 拍	4 拍
A	箱	ハ[コ]	ハ[コ]ガ~ハ[コ]ガ	ハ[コカ]ラ
	魚		サ[カ]ナ	サ[カナ]ガ
B	山	ヤ[マ]	ヤ[マ]ガ	ヤ[マカ]ラ
	心		コ[コロ]	コ[コロ]ガ
C	窓	[マ]ド	マ[ド]ガ	マ[ドカ]ラ
	畑		ハ[タ]ケ	ハ[タケ]ガ

3 拍以上の語・4 拍以上の文節に A, C 型の対立は現れないが、2 拍語の単独形または 1 拍助詞が付いた形に辛うじてその区別が残る。2 拍語における A 型=○[○]／B 型=○[○]／C 型=[○]○という対立は長橋式 (4.2 節) や鮎川式 (4.3 節) と共通するものである。通時的には、長い語・文節から次第に A, C 型の対立が失われていく過渡期にあり、両型が完全に合流し二型化する直前の段階にあたると考えられる。

4.7 和布、蓑、菅生（無型）

和布、蓑、菅生の 3 地点については、弁別的なアクセントの対立がない（＝無型）と判断した。無型と認める目安は、まず当然ながら話者による発話に一貫した対立が聴かれないうこと、そして、花と鼻などの最小対を話者に提示してもそれらをアクセントの違いにより発音し分ける意識が窺えないことである。あくまでも調査時間・調査人数とにもごく限られている中での判断であり、調査票の読み上げや最小対の提示以外の調査方法を採ればアクセントの対立が現れる可能性、または集落内に個人差があり他の話者を調べれば何らかの対立が聴かれる可能性は残る。

4.7.1 無型 3 地点の音調

話者による発話が実際にどのような音調で実現するかは、地点ごとに大きく異なる。

和布は音声実現の揺れ幅が最も大きい。2 拍語の発音であれば、[○]○～[○○]～[○○～○[○～○○(低平)、3 拍語の場合、[○○]○～[○○○～○[○]○～○[○○～○○[○～[○]○[○と様々なピッチパターンに読まれる。

対して蓑地区では○[○、○[○○、○[○○○といった平板型が主に聴かれる。時折－2 型([○]○、○[○]○、○[○○]○)にも実現する。

菅生（南菅生町）では、[○]○、[○]○○、[○]○○○といった頭高型が頻出する。調査票の読み上げにおいても、また話者同士の会話においてもよく聴かれ、平野部や和布・蓑地区の無型方言とは発話・会話を耳にした印象が大きく異なる（平野部の無型方言において[○]○○...といった 3 拍以上の頭高型はほとんど聴かれない）。[○]○○、[○]○○○型を持つ点は、南隣の鮎川方言の影響とも考えられる。

4.7.2 無型アクセントの成立過程

この3地点は型の区別が明瞭なN型方言に周囲を囲まれ平野部の無型とは地理的に不連続であることから、各地点の無型は平野部から伝播したものではなく、本地域で独自に発生したものと考えられる。本項では、無型に隣接する体系（三国式と長橋式）に無型化の端緒と思われる現象が存在することを指摘し、そこから無型の成立に至る過程を考察する。

1つ目の現象は、三国式の浜別所方言に観察される「おおよそ5拍以上の長い語・文節に顕著に見られる型の併用・混同」である。例えば、[ニ]ワ（庭）と[ヤマ（山）]の対立は4拍以下の文節では安定して実現するが、5拍文節になると主に α 型の音調に統一される形でほとんど区別が聴かれなくなる（ニ[ワヨリ]モ=ヤ[マヨリ]モ）。また5拍以上の語には4拍以下の短い語に比べて1つの型に定まらない（ α 、 β 両型を併用する）ものが多い⁹。

なお、一光式のA、C型（4.6節）や国見式のB、C型（4.4節）もまた一定以上の長い語・文節において区別が現れなくなることを先に述べたが、これらも「型の合流・混同は長い語・文節から先に生じやすい」ことを示す現象である。

2つ目は、長橋式と三国式の米納津方言に観察される「接続形における一部または全部の型の中和」である。4.2節と4.5節で述べた通り、長橋式では3拍以上の接続形が○[○○]...、○[○○○]...に一型化し、米納津では接続形が α 型の音調（[○○]○...、○[○○]○...）に統一される。

以上2つの現象が、もし1つの二型アクセント方言に重なって生じた場合には、結果として「おおよそ4拍以下の短い語・文節の言い切り形でのみ型の対立が現れる」体系が生じるはずである。そして型の混同・併用が4拍文節、3拍文節にまで及んでいくと、最終的には、佐藤（1983）が福井市内の（当時の）高年層話者に見出したような「2拍語の単独言い切り形にのみかろうじて型の区別が残る」状態¹⁰に行き着くのだと考えられる。これが無型化完了の直前段階である。

音韻的な型の対立数の減少は、何らかの規則的な音声的変化の結果 x 型と y 型が同じ音調に合流することで生じるものとは限らず、まずは一部の環境における型の「中和」や「併用」といった、それ自体は体系の枠組みを崩さない変化がきっかけとなって、徐々に型の区別が現れない範囲が拡大していく過程を経て完了する場合もあると考えられる。いずれの過程を想定するにせよ、無型の成立は言語外的要因によらない自律的・体系的な変化の結果として捉えられる。

⁹ 5拍以上の語・文節でも必ずしも型の区別が不安定な訳ではない。例えば「2拍名詞+助詞3拍」では不安定でも「4拍名詞+助詞1拍」では比較的安定して対立が聴かれる。また話者自身、5拍以上の語に対しても型を区別する意識は有する。

¹⁰ 佐藤（1983）は福井市のアクセントについて「[.]今回調査した話者の幼年時代、すなわち明治末期から大正初期にかけては三国式アクセントが優勢であったと考えられる。そして、まず3拍名詞から型の区別を失い、ついで2拍名詞の文節に及び、かろうじて2拍名詞の単独言い切り形について型の区別を保っている話者が（高年層については）多数見られるのが現状と言えよう。」（佐藤1983: 69）と結論付けている。

5. 東部山間部（福井市美山地区）のアクセント

福井市美山地区は足羽川とその支流に沿った谷あいの平地に集落が点在する農山村である。旧足羽郡美山町（2006 年に福井市に編入）に相当する地域であるが、1955 年以前は美山地区の西部（足羽郡）と東部・南部（大野郡）で異なる郡に属していた。

平野部に近い足羽川の下流方面（市波、獺ヶ口、品ヶ瀬、蔵作）には無型アクセントが分布する。その他の地点は多型アクセントの分布域である。足羽川の上流方面（東天田、河原）と支流の羽生川流域（境寺、薬師、間戸、縫原、大宮、計石）はいわゆる垂井式アクセントで、旧大野郡域に広く分布することから「大野式」と呼ぶ。

美山地区北部の芦見川流域（吉山、籠谷、西中）には、類別体系（「類」の統合の在り方）が大野式と大きく異なる体系が分布する（これを「芦見式」と呼ぶ）。芦見川上流の所谷方言は、類別体系の面で大野式と芦見式の間隔的な特徴を備える。

無型方言と多型方言の境界線はおおよそかつての郡境に一致する。旧大野郡の 10 地点は全て多型で、旧足羽郡の 6 地点（市波、獺ヶ口、品ヶ瀬、蔵作、境寺、東天田）のうち 4 地点が無型、郡境に接する 2 地点（境寺¹¹、東天田）が大野式である。

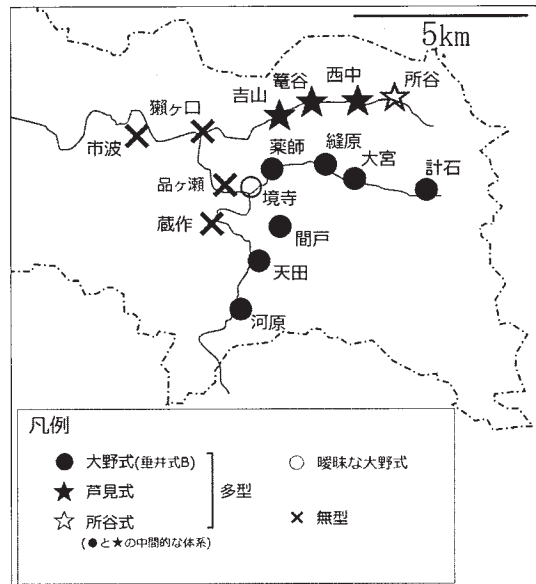


図 3 東部山間部のアクセント分布

5.1 大野式（足羽川・羽生川流域の多型アクセント）

大野式は、下げ核の有無とその位置が対立する多型アクセントである。式の対立はなく、また語末核を欠く体系と見られる。よって基本的には n 拍語に n 通りの型の区別がある（ただし 1 拍語は 2 通り）。羽生川流域（大宮地区）の体系を取り上げる。

(15) 大野式（大宮）の 1~4 拍名詞の音調

型	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍
0	[カ 「蚊」	[ハコ	[サカナ	[ニワトリ
1	[ハ] 「葉」	[ヤ]マ	[イ]ノチ	[カ]ミサマ
2			[カガ]ミ	[カミ]ナリ
3				[カミ]ノケ

¹¹ 無型方言と大野式方言の境界付近に位置する境寺地区は、音調の高低差が小さく、アクセントの区別意識が他地点と比べて希薄であるように見受けられ、図 3 では「曖昧な大野式」の地点とした。

いずれの型も語頭拍から高い。無核型は語頭から高いピッチが平らに続くもので、東京方言の無核型とは異なり、むしろ中央式アクセント等の高起式無核の音調に近い¹²。

1~3 拍名詞における類別語彙（金田一 1974）との対応は概ね (16) の通り。ただし 3 拍名詞には例外も多い。

(16) 大野式（大宮）の名詞の類別体系

- 1 拍：1・3 類＝無核／2 類＝1 型（[蚊ガ・[芽ガ／[葉]ガ）
 2 拍：1・4 類＝無核／2・3・5 類＝1 型（[ハコ・[フネ／[オ]ト・[ヤ]マ・[マ]ド）
 3 拍：1・6 類＝無核／4・7 類＝2 型／5 類＝1 型
 （[サカナ・[スズメ／[カガ]ミ・[ハタ]ケ／[イ]ノチ）

5.2 芦見式と所谷式（芦見川流域の多型アクセント）

芦見川流域に分布する芦見式及び所谷式は、大野式と同じく下げ核の有無とその位置が対立する多型アクセントである。式の対立はなく、語末核を欠く体系と見られる。以下、芦見式の記述は西中地区の調査結果に基づく。

(17) 芦見式（西中）の 1~4 拍名詞の音調

型	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍
0	[メ 「芽」	フ[ネ	ネ[ズミ	ニ[ワトリ
1	[ハ] 「葉」	[ヤ]マ	[ナ]ミダ	[カ]ミサマ
2			オ[ト]コ	ア[サ]ガオ
3				ア[クル]ヒ

芦見式・所谷式ともに体系の枠組は共通するが、各型の所属語彙に大きな違いがある。1~3 拍名詞の類別体系を以下に示す。

(18) 芦見式と所谷式の名詞の類別体系

(a) 芦見式

- 1 拍：1・2 類＝1 型／3 類＝無核（[蚊]ガ・[葉]ガ／芽[ガ）
 2 拍：1・2・3 類＝1 型／4 類＝無核（[ハ]コ・[オ]ト・[ヤ]マ／フ[ネ）（5 類まともりなし）
 3 拍：1a・6・7 類＝無核／1b・4 類＝2 型（5 類まともりなし）

¹² ただし語頭拍の高低（句頭の音調）には地域差がある。足羽川流域の河原、東天田、境寺では語頭拍が低く 2 拍目にかけて上昇が聴かれる発話（○[○...]）が多い。無核型の音調も東京方言のそれに近い。

(b) 所谷式

1 拍 : 1・3 類=無核/2 類=1 型 (蚊[ガ・芽[ガ/[葉]ガ)

2 拍 : 1・4 類=無核/2・3 類=1 型 (ハ[コ・フ[ネ/[オ]ト・[ヤ]マ) (5 類まとまりなし)

3 拍 : 1・6・7 類=無核/4 類=2 型 (5 類まとまりなし)

最も重要な相違は、1 類語がおおよそ芦見式で有核、所谷式で無核に対応する点である。その他の類の対応型は概ね一致する。2 拍 5 類と 3 拍 5 類には有核語と無核語が混在し類全体がまとまって 1 つの型に対応しない点も、両体系に共通する¹³。

芦見式の 3 拍 1 類名詞には、語末母音の広狭に応じて有核と無核に分かれる傾向が認められる。語末母音が広母音であれば無核、広母音でなければ有核または無核に対応する。

(19) 芦見式における語末母音に関わる 3 拍 1 類の分裂 (下線は 1 型語)

	〇〇W	〇〇W以外
無核 (1a 類)	霞、筏、田舎、鯉、蕪菁、河原、着物、 車、子供、衣、魚、桜、序で、机、 名前、膠、寝言、二十日、二日、味方、 みぞれ、三日、港、都、六日、櫓、 やもめ、八日、涎 (29 語)	値、錨、鰯、嗽い、漆、飾り、鎖、 仔牛、麴、小鳥、障子、薪、疊、 ちまき、額、昔、柳、鎧 (18 語)
有核 (1b 類)	かまど、 <u>舅</u> 、 <u>息子</u> (3 語)	踊り、霞、形、煙、氷、今年、悟り、 印、相撲、隣、望み、鼻血、庇、棺、 羊、日照り、埃 (17 語)

どのような通時的過程あるいは社会的要因があつてこのような特異な対応を生じたかについては、周辺方言との一層詳細な比較を行った上で改めて考察する必要がある¹⁴。ちなみに所谷式では「かまど」「霞」「氷」の 3 語を除いて (19) に挙げた語は全て無核である。

¹³ 西中と所谷で無核の 2 拍 5 類語 : 汗、雨、鮎、桶、黍、鯉、縦、足袋、鍋、鮎、蛇、窓。

西中と所谷で有核の 2 拍 5 類語 : 藍、青、赤、秋、兄、井戸、陰、黒、声、琴、猿、白、露、鶴、春、蛭、前。(西中で有核・所谷で無核 : 蛇、牡蠣、蜘蛛、鮭。西中で無核・所谷で有核 : 朝、眉、婿)

3 拍 5 類語は 3 つの型に分属する。芦見式 (西中) での対応は以下の通り。

【無核】油、親子、胡瓜、簾、櫓、茄子、柱、火箸、簪、枕、山葵

【1 型】鮑、命、神楽、鰯 (2 も)、姿、涙、眼、紅葉

【2 型】朝日、主、哀れ、五つ、従兄弟、鰯 (1 も)、心、柘榴、情け、錦、単衣

¹⁴ 仮説 1 : 元々語末母音に関係なく 3 拍 1 類全体が x 型と y 型に分裂していて、x 型が現在の無核型に通じ、y 型が語末母音の広狭に応じて無核型と有核型に分裂した。

仮説 2 : 元々 3 拍 1 類全体が語末母音の広狭に応じて無核型と有核型に分かれていたが、所谷式や大野式との接触により一部の有核語が無核に転じた。

芦見式に対応する 3 拍 1 類の分裂が他地域の方言にも見つければ、仮説 1 が支持される。仮説 2 の証明は難しいが、芦見式方言が所谷式や大野式の影響を強く受けていることは事実と思われる。特に本稿の話者は自らのアクセントと大野式方言のアクセントの違いをよく意識しており、しばしば「西中ではア[メ (雨) だが (大野式方言では) [ア]メと言う」などとその違いを指摘される (そしてその指摘は実態に沿っている)。

大野式を合わせた 3 種の体系を比較すると、所谷式は、類別語彙との対応関係という面で大野式と芦見式双方の特徴を併せ持つことがわかる。

(20) 2 拍 1,5 類・3 拍 1,5,7 類に対応する型の比較

類	大野式	所谷式	芦見式
2 拍 1 類	無核	無核	有核
3 拍 1 類	無核	無核	無核か有核
2 拍 5 類	有核(1 型)	有核か無核	有核か無核
3 拍 5 類	有核(1 型)	有核か無核	有核か無核
3 拍 7 類	有核(2 型)	無核	無核

6. 複合名詞・動詞活用形アクセント及び類別体系の対照・比較

ここまで 4 章と 5 章に分けて西部沿岸部の N 型アクセントと東部山間部の多型アクセントの概略を述べた。6 章では、2 つの地域をまたいで諸体系を対照し、基本的枠組み（N 型か多型か）の違いに加え、複合名詞と動詞活用形のアクセントに見られる各体系の特徴・相違点を明らかにする。最後に歴史的な対応関係（類別体系）の違いを改めてまとめる。

6.1 複合名詞アクセント

複合語アクセントの決定に主にどのような要素が関与するのか、6 種の体系（二型 1 種、三型 3 種、多型 2 種）について、前部要素 2 拍＋後部要素 2,3 拍の複合名詞を例に示し簡単に述べる。

(21) 後部要素「袋、箱、仕事」を持つ複合名詞の音調型

体系・地点 語例	二型	三型			多型	
	浜別所	長橋	鮎川	蒲生	大宮	西中
布袋（布 A, α ）	α	A	A3	A	3	3
紙袋（紙 B, β ）	β	B	B	C	3	3
箸袋（箸 C, α ）	α	C	C	C	3	3
筆箱（筆 A）	—	A	A3	C	—	0
紙箱（紙 B）	—	B	B	C	—	0
箸箱（箸 C）	—	C	C	C	—	0
庭仕事（庭 A, α ）	α	A	A3	A	3	3
山仕事（山 B, β ）	β	B	A3	A	3	3
針仕事（針 C）	—	C	A3	A	3	3

語例右の（ ）内は N 型諸方言における前部要素の型を表す。

複合語「～袋」は、N 型諸体系において、概ね前部要素と同じ型を持つ。ただし蒲生では前部要素が B 型の場合複合語全体は C 型となる（「米 (B 型)」に対し「米袋」も C 型）。変則的ではあるが前部要素の型を参照している点は他の N 型と共通する。一方で、多型方言においては前部要素にかかわらず 3 型に統一される。

複合語「～箱」も、長橋と鮎川においては前部要素の型を引き継ぐ。しかし蒲生では前部要素の型にかかわらず C 型となる。西中（芦見式）ではすべて無核型となる。

複合語「～仕事」は、浜別所（三国式）と長橋で前部要素の型と一致し、鮎川と蒲生では前部要素の型にかかわらず A 型に統一、多型方言では 3 型に統一される。

これらの例から窺い知れる通り、沿岸部の N 型諸方言においては前部要素の型が複合語全体の型に引き継がれる（前部要素の型が複合語アクセントの決定に関与する）傾向が広く認められる一方（(21)の太枠内は前部要素決定の例）、東部山間部の多型諸方言では原則として、後部要素ごとに複合語の型が一貫する（後部要素の性質により複合語アクセントが決定する）。ただし N 型諸方言にも、鮎川・蒲生における「～仕事」のように後部要素が複合語アクセントの決定に関わる例は多数確認される。

6.2 動詞活用形のアクセント

沿岸部の三型諸体系は、その音声実質が体系ごとに著しく異なる一方で、A~C 各型の所属語彙にはほぼ完全な対応が見られ、動詞活用形のアクセントもまた体系間でよく一致する。一方東部山間部では動詞のアクセントの地域差が大きく、同じ芦見式のあるいは同じ大野式の地点間にも多くの相違点が認められる¹⁵。以下本稿では 2 拍五段動詞の基本的な 5 つの活用形（基本形、否定形（－ン）、過去形（－タ）、進行・完了形（－テル）、過去否定形（－ナンダ））のアクセントを対照する。

(22) 2 拍五段動詞の活用形の音調型

体系・語例 活用形	二型(浜別所)		三型諸体系		芦見式(西中)		所谷式		大野式(大宮)	
	置く	書く	置く	書く	置く	書く	置く	書く	置く	書く
基本	α	α	A	C	1	0	0	0	0	0
否定	α	β	A	B	2	0	0	0	0	0
過去	β	α	B	C	1	0	1	0	1	0
進行	β	α	A	C	1	0	0	0	0	0
過去否定	β	β	A	C	0	0	0	0	2	2

¹⁵ 主に 3 拍以上の動詞に地域差が目立つ。例えば 3 拍一段動詞の基本形における 1 類（上げる、植える、枯れる等）と 2 類（逃げる、伸びる、見える等）の区別の有無には大野式、芦見式内部に地点差（あるいは個人差か）がある。大野式の縫原では 1 類=無核（[アゲル]）／2 類=有核（[ノ]ビル～[ミエ]ル）で区別があるが、その他の地点では多くの語が 1, 2 類ともに無核で区別がない。芦見式の西中・吉山では 1 類=有核（ア[ゲ]ル）／2 類=無核（ミ[エ]ル）で区別があるが、簗谷では 1, 2 類ともに有核で区別がない。

三国式では、「置く」「書く」それぞれの一連の活用形の型が複雑に交替し、動詞活用形とアクセント型の関係には（少なくとも共時的には）著しい不規則性が認められる。三型諸体系では、「置く」の活用形が概ね A 型、「書く」の活用形が C 型に一貫する傾向はあるが、一部の活用形に B 型が交じる。

一方多型の芦見式（西中）では、過去否定形を除いて「置く」の活用形は有核、「書く」は無核で一貫しており、核の有無に関してある程度の一貫性が成り立つようである。

所谷式と大野式では「置く」「書く」とともに多くの活用形が無核型となり、この 2 語がアクセント上対立する活用形は過去形に限られる。なお過去否定形は大野式（大宮）で 2 型、所谷式では芦見式と同じく無核型となり、所谷式はここでも大野式と芦見式の間隔的な姿を示す。動詞ごとに一連の活用形が特定の型に一貫する（活用形の違いにかかわらず同じ動詞ならば同じ型を持つ）傾向が見られる三型諸体系や芦見式とは異なり、所谷式と大野式は、動詞の別にかかわらず活用形ごとに同じ型に統一される（同じ活用形ならば同じ型を持つ）傾向を示す。

6.3 類別体系の比較

西部沿岸部の三型諸体系における金田一語類（金田一春彦 1974）との対応関係は、脚注 2 で触れた通り 2 拍名詞が 1 類=A 型/2・3 類=B 型/4・5 類=C 型、3 拍名詞がおおよそ 1・4 類=A 型/5 類=B 型/6・7 類=C 型となる。二型の三国式は 2 拍名詞が 1・4・5 類= α 型/2・3 類= β 型、3 拍名詞が 1・4・6・7 類= α 型/5 類= β 型となり三型の A, C 型が合流した体系に相当する。東部山間部の多型方言の類別体系は (16)(18) に示した通り。

福井市内の 4 種の体系（三国式、鮎川式、芦見式、大野式）の 2 拍名詞の類別体系と各級の音調を (23) にまとめる。

(23) 福井市内 4 方言の類別体系と各級の音調の比較

体系 類	二型(浜別所)	三型(鮎川)	芦見式	大野式
	145 / 23	1 / 23 / 45	1235y / 45x	14 / 235
1 類(箱)	α [ハ]コ [ハコ]ガ	A ハ[コ] ハ[コガ]	1 [ハ]コ [ハ]コガ	0 [ハコ [ハコガ
2 類(川)	β [カ]ワ	B カ[ワ]	1 [カ]ワ	1 [カ]ワ
3 類(山)	β [ヤマ [ヤマガ	B ヤ[マ [ヤ]マ[ガ	1 [ヤ]マ [ヤ]マガ	1 [ヤ]マ [ヤ]マガ
4 類(舟)	α [フ]ネ	C [フ]ネ	0 フ[ネ]	0 [フ]ネ
5x 類(窓)	α [マ]ド [マド]ガ	C [マ]ド [マ]ドガ	0 マ[ド マ[ドガ	1 [マ]ド [マ]ドガ
5y 類(春)	α [ハ]ル	C [ハ]ル	1 [ハ]ル	1 [ハ]ル

4種ともに同じ福井市内の方言でありながら、それぞれに類別体系も各類の音調も大きく異なることがわかる。二型を除く3種の体系のうちいずれの2種を比較しても、その共通祖体系の2拍名詞には少なくとも4通りの類の区別が再建される(大野式と芦見式:1/235y/4/5x 大野式と三型:1/23/4/5 芦見式と三型:1/23/45x/5y)。

7. まとめ

本稿を振り返りまず今一度強調したい点は、本稿の記述のほとんどは無型アクセントで知られる福井市内の方言を対象にしているということである。福井市内の沿岸部や山間部の広い範囲には、無型アクセントが分布する平野部とは全く異なる言語世界が広がっており、未報告種を含む多種多様なアクセント体系を耳にすることができる。

東西両端それぞれの地域(西部沿岸部と東部山間部)に分布する体系を対照すると、まず体系の根本的な枠組み(N型または多型)が異なり、複合語アクセント規則などの共時的な性質にも相違が見られる。また類別体系が大きく食い違うことから、系統的にも互いに遠くかけ離れた関係にあることがわかる。

また、それぞれの地域におけるアクセント体系の地理的分布の在り方と、地域内の方言差に対する話者の認識にも違いがある。

東部山間部ではかつての行政区域ごとにあるいは川筋ごとにほぼ同じ体系がある程度まとまって分布する(旧足羽郡は無型、旧大野郡は多型。芦見川流域は芦見式と所谷式、羽生川流域は大野式、など)。現地の話者の間では、無型方言と多型方言の地域差がはっきりと認識されている一方で、大野式と所谷式、芦見式の違いはほとんど知られていないかあるいはそれほど重大な方言差としては認識されていない。アクセント等に多少の違いがあったとしてもおおそ旧大野郡域は広く同じ方言圏に含まれる、といったかつての行政区域に沿った方言差意識が共有されているようである。

沿岸部は、北部の農村地域には三国式のまとまった分布が見られるようであるが、南部の漁村地域を中心として、集落ごとにアクセント体系が異なるいわばモザイク状の分布を示す。現地の話者の間では、おおそ北部と南部(農村と漁村)で方言全体として大きく異なることがよく知られている¹⁶。その上で、特に南部ではアクセントの集落差が強く意識されており、1つ1つの集落ごとに全く異なる独自の方言が使われているという方言観がある。話者たちの言語面での帰属意識は郡や市町村といった広い領域にはなく、あくまでも集落という単位にある¹⁷。

以上、本稿では福井市内のアクセントの多様性を示したが、今後は福井市外の周辺方言との対照・比較を行いながらその記述・分析を進める必要がある。特に福井県の沿岸部各

¹⁶ 農村方言と漁村方言の境界はどこかと尋ねると、多くの話者から「糸崎―長橋間」との回答が得られる(福井市糸崎町は長橋の北隣、養の南隣に位置する農村)。

¹⁷ 険しい海岸地形のために集落間の地理的隔絶がやや大きく、また、集落ごとに言語だけでなく人の気質や先祖のルーツもまた異なるという話がよく聞かれる。このような集落間の地理的・社会的な距離のために、各集落の言語的な独立性が維持されているのではないかとと思われる。

地に分布する N 型諸体系については、共時的な面でどのような共通点・相違点が見られるか、またどのような歴史的過程を経てこれほど多種多様な体系が分岐・成立していったのか等の問題が残されているが、福井市沿岸部の N 型諸体系の発見によって、ようやくこれらの問題を総括的に議論するために必要不可欠な手掛かりが出揃ったと言える。

謝辞

本稿の執筆にあたっては大変多くの方々にお世話になりました。長時間の調査にご協力頂いた話者の皆様、並びに、協力者の方々をご紹介頂いた福井市美山公民館、福井市橐公民館、福井市鷹巣公民館、福井市本郷公民館、福井市一光公民館、坂井市浜四郷コミュニティセンター、福井市国見公民館、国見地区社会福祉協議会、福井市越廼公民館（訪問順）の皆様にご礼申し上げます。

本稿の一部（4 章など西部沿岸部に関わる部分）には日本方言研究会第 104 回研究発表会での口頭発表（発表題目「福井市沿岸部の N 型アクセント」）に際して頂いたコメントを踏まえ加筆・修正を行った部分を含みます。ここに記してご指導への感謝を申し上げます。

本研究は科研費補助金（特別研究員奨励費）「言語地理学と比較再建に基づく福井・石川両県のアクセントの記述的・通時的研究」（16J03745）の支援を受けたものである。

参考文献

- 上野善道（2012）「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16（1），44–62.
- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京：塙書房.
- 佐藤亮一（1983）「福井市，および，その周辺地域のアクセント—調査法と型の区別の現れ方との関連を中心に—」『国語学研究』23，1–19.
- 新田哲夫（2012）「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16（1），63–79.
- 平山輝男（1953）「福井県嶺北地方の音調とその境界線」『音声学会会報』83，1–4.
- 松倉昂平（2015）「福井県あわら市北潟方言及び清滝方言のアクセント資料」『東京大学言語学論集』36，e9–e31.
- 松倉昂平・新田哲夫（2016）「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20（3），81–94.
- 松森晶子（2016）「三型アクセント記述研究の現在と未来—隠岐島の三型アクセントに焦点を当てながら—」『音声研究』20（3），24–45.
- 山口幸洋（1984）「福井市郊外の二型アクセント」『方言研究年報』27，207–229. 大阪：和泉書院.

Distribution of Accent Systems in the Coastal Area and the Mountainous Area of Fukui City

MATSUKURA Kohei

Keywords: N-pattern accent, 3-pattern accent, 2-pattern accent, Mikuni type, Japanese accent, Tarui type, Fukui dialect

Abstract

The author's investigations of accent systems at 29 villages in the coastal area and the eastern mountainous area of Fukui City show that N-pattern accent systems are distributed in most of the coastal area and multi-pattern accent systems are distributed in the eastern mountainous area. This paper will start by outlining the accent systems of each dialect, going on to compare the accent rules for compound nouns and show how they correspond to the word classes known as '*ruibetsu-goi*' (Kindaichi 1974) to reveal the characteristics of each system in respect of both the synchronic rules and the historical relationship with other dialects.

(まつくら・こうへい 東京大学大学院博士課程)